

ユダヤ・イスラエルに思う^⑩ ディアスポラのユダヤ人（前編）

長谷川 修

一世紀の後半、ローマ軍によってエルサレムの街と神殿を徹底的に破壊されたユダヤ人は、父祖の地を離れた。それから一九世紀間、一九四八年のイスラエル建国までのディアスポラ（離散）の足跡を辿ってみたい。

故郷を追われたユダヤ人は、パレスチナ各地とバビロニア地方に逃れ、五世紀にはラビを指導者とする宗教体系を整え共同体結束の礎とした。七世紀のアラビア半島でムハンマドはイスラム教を創建するが、商人仲間で近くに住むユダヤ人・ユダヤ教徒の影響は大きく、イスラム教とユダヤ教の類似性は高い。イスラムはユダヤ人に寛容で「啓典の民」として保護した。

その後イスラム帝国の急拡大に伴って、地中海東岸、北アフリカ、イベリア半島とユダヤ人の定住地も広がっていく。スペインへ移住したユダヤ知識人はギリシャ語、アラビア語を駆使して医学・科学・哲学等を究め、コルドバは「一二世紀ルネサンス」の発信地となった。

西欧のキリスト教社会では教皇権の進展に伴いカトリック全盛時代を迎え、一二〜一四世紀には十字軍（聖地奪回）やレコンキスタ（イベリア半島再征服）により異教徒排除を目指す。ユダヤ人はイスラムに内通する者として抑圧の対象となり、またペストの大流行に際しては各地で儀式殺人の被害者となった。スペインでは一四九二年、レコンキスタ終了の年にユダヤ人追放令が出される。

ユダヤ人の向かう先は二方向あった。一つは東方のオスマン帝国である。オスマンでは、ジズヤ（人頭税）さえ払えば自由は保証されたから多くの人が移住し、宮廷官僚として出世する者も出た。もう一つは北方のプロテスタントの国で、アムステルダム、ロンドン等では遠隔地貿易の担い手となっていく。

こうしたユダヤ人の足跡は、帝国の興亡と合わせると興味深い。バビロン（ペルシヤ）、コルドバ（イスラム）、イスタンブル（オスマン）、アムステルダム、後編で述べるニューヨークと、それぞれの地は伸び盛りで躍動する自由があった。